

## 第60回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

「祖父から父へそして僕へ」

長野県 佐久市立野沢中学校 二学年

臼田 恵梧

ご先祖様が帰ってくるお盆にみんなで仏壇に手を合わせた。仏壇に並んだ位牌の一つは祖父の物だ。

祖父、つまり僕の父の父は、父が中学三年の秋に亡くなった。その時のことを父は、

「お父さんが亡くなって悲しかったのは当たり前前だけど、これから高校や大学に行けるのか不安でしようがなかった。」  
と言っていた。

その頃、父達は新しい家に住み始めて二年くらいでローンの返済や習い事、高校や大学の学費を祖父無しでどのように準備すればいいのか不安だったようだ。

父はというと、心配していた進学をあきらめずに済んで、なんとか大学を卒業できた。なぜなら、祖父がきちんと生命保険に入っていたからだ。

家のローンは、ローンを組んだ時に入った生命保険で返済し、学費などは別の生命保険と祖母が一生懸命に働いてなんとかしたそうだ。今の父があるのは、祖父が生命保険に入っていたからと言えるし、僕がここにいるのも生命保険があつたからかもしれない。生命保険は、会ったことのない祖父と僕をつないでくれたのかもしれない。

そう思うと、生命保険というものは、人と人、過去と今を、つないでくれるものだと思う。生命保険が中学生だった父と今の自分をつないでくれたような気がした。それだけでなく、今の家族みんなをつないで守ってくれたのは生命保険だったと思うと、とても頼もしく思える。これから先も僕や家族をつないで守ってくれると思う。

送り盆の日の夕方、一族のお墓の前で手を合わせ祖父に感謝しながら『また来年』と心の中でつぶやいた。